

JSSGS

Japan Society for Sport and Gender Studies

日本スポーツとジェンダー学会 第 19 回大会

プログラム & 発表抄録集

開催日: 2020 年 10 月 24 日 (土)

時 間: 12:30 ~ 16:45

方 法: オンライン開催 (Zoom 利用)

主 催: 日本スポーツとジェンダー学会 <https://jssgs.org>

参加者のみなさまへ(諸連絡)

- 参加者のみなさまに事前に配布している「日本スポーツとジェンダー学会第19回大会参加者向けZoomの利用方法」をご確認いただき、オンライン会議参加に必要な機器をご準備下さい。
- 大会には事前申込が必要です。JSSGSホームページの申込サイトよりお申込下さい。
- キャンセルによる大会参加費(非会員のみ)の返金には応じかねますので、ご了承ください。
- 大会の様相を記録するためにオンライン学会大会を録画いたします。参加者のみなさんのプライバシーには十分配慮し、記録用のみに活用いたします。ご了解くださいますようお願い申し上げます。

アンケートご協力のお願い

より充実した大会を開催するため、参加者のみなさんにアンケートへの協力をお願いしております。大会後にオンラインアンケートフォームのURLをお伝えしますので、ご記入の上、提出をお願いいたします。皆様のご意見をお待ちしております。

日本スポーツとジェンダー学会における個人情報の取り扱いについて

「個人情報保護法(個人情報の保護に関する法律)」の施行(2005年4月1日)を受け、日本スポーツとジェンダー学会(以下、本学会という)主催の学会大会における会員以外の参加者の個人情報の取り扱いを、下記のとおり定めております。

本学会は、研究機関として個人情報を取り扱う場合に、目的のために必要な情報のみを本人の同意に基づいて取得し、目的の終了後には速やかに削除することを基本方針としています。組織運営および研究事業においてもこの基本方針を遵守し、また今後とも継続的に改善することにしていきます。

1. 大会参加のための手続書類で取得した個人情報の利用目的について(会員外)

本学会は、会員外の参加者のみなさんから参加手続で取得した氏名、住所など個人情報を、以下の目的のみに利用します。

- 1) 当該大会の円滑で安全な運営のため
- 2) 今後の本学会の研究活動の参考資料とするために、個人を識別できない形式による参加者の統計作成

2. お問い合わせ先

個人情報に関するお問い合わせは、本学会事務局(e-mail: info@jssgs.org)までお寄せ下さい。

運営組織

日本スポーツとジェンダー学会 第19回大会 実行委員会

部署	氏名
大会委員長	來田享子(中京大学)
実行委員長	來田享子(中京大学)
事務局長	木村華織(東海学園大学)
総務	藤山 新(東京都立大学ダイバーシティ推進室) 井谷聡子(関西大学)
研究	熊安貴美江(大阪府立大学) 井谷恵子(京都教育大学) 小林直美(愛知工科大学) 來田享子(中京大学) 高峰修(明治大学) 山口理恵子(城西大学) 三上 純(大阪大学大学院)
会場	伊東佳那子(中京大学) 石原康平(中京大学大学院)
財務	赤澤祐美(東海学園大学)
受付	大勝志津穂(愛知東邦大学)
広報	岩佐直樹(朝日大学)

大会プログラム

< 10月24日(土) >

12:30~12:45 会長・実行委員長挨拶、組織委員会事務局からの連絡事項

12:45~12:50 休憩・準備

<一般発表 12:50~14:10>

12:50~13:10 「多様性・共生の視点からみた『東京 2020』オリパラ教育の課題」

発表：井谷恵子（京都教育大学） 座長：後藤光将（明治大学）

13:10~13:30 「多様性の視点からみた日本での『身体リテラシー』概念導入の課題」

発表：三上純（大阪大学大学院） 座長：山口理恵子（城西大学）

13:30~13:50 「女性アスリートのジレンマと『二重のジェンダー構造』の関係性を問う」

発表：申恩真（北星学園大学） 座長：合場敬子（明治学院大学）

13:50~14:10 「トランス・アスリートの受容に関する研究」

発表：松下千雅子（名古屋大学） 座長：藤山新（東京都立大学ダイバーシティ推進室）

14:10~14:20 休憩・準備

<ワークショップ 14:20~16:35>

14:20~14:25 ワークショップ趣旨説明：熊安貴美江

<WS-A> 司会：熊安貴美江

テーマ：「コロナ禍における体育・スポーツに関連する話題」

14:25~14:40 話題提供 A-①

「コロナ禍における運動・スポーツ実施状況-ジェンダー差は生じているのか？」

大勝志津穂（愛知東邦大学）

14:40～14:55 話題提供 A-②

「コロナ感染拡大の経済への影響はスポーツやジェンダーに如何に波及するのか？」

高峰修（明治大学）

14:55～15:25 意見交換

15:25～15:35 休憩・準備

<WS-B> 司会：前田博子

テーマ：「2020 横浜スポーツ学術会議における『スポーツとジェンダー』にかかわるシンポジウム報告」

15:35～15:50 話題提供 B-①

「スポーツにおける性別二元制と高アンドロゲン症規定」

井谷聡子（関西大学）

15:50～16:05 話題提供 B-②

「性が固定されがちなスポーツにおいて、それを克服してきた選手たち」

宮嶋泰子（スポーツ文化ジャーナリスト カルティベータ代表）

16:05～16:35 意見交換

16:35～16:45 閉会（会長・実行委員長挨拶、事務局連絡）

日本スポーツとジェンダー学会 第19回大会
発表抄録

<一般発表 1 12:50~13:10>

多様性・共生の視点からみた「東京 2020」オリパラ教育の課題

○ 井谷恵子（京都教育大学）

キーワード：オリパラ教育、ジェンダー視点、多様性・共生、価値教育

目的：「東京 2020」に向けて推進されているオリパラ教育（スポーツ庁による略称）について、開催理念に掲げられている「多様性・共生」の視点から検討する。①「オリンピック価値教育」に関する教育的課題 ②スポーツ庁を中心に展開されているオリパラ教育における多様性・共生に関する実践内容の課題 ③新たな学力観からみた学習方法に関する課題 の3点を検討の視点とした。

結果・考察：①「オリンピック価値教育の基礎」（IOC、2017）や「オリンピック・パラリンピック教育の推進に向けて」（有識者会議、2016）など、推進の基盤となる文書においては、「教育的価値」の両義性や歴史的、社会学的観点からの検討が見当たらない。一元的な価値を制度化することへの躊躇やジェンダー規範など潜在的教育についての検討が不足している。②多文化的な世界に生きる若者が多様性を受け入れ、尊重し合うことは基本的な学習テーマとして掲げられ、スポーツ庁による実践報告集においても5つのテーマの1つに「III スポーツを通じたインクルーシブな社会(共生社会)の構築」が示されている。しかし、示された実践事例は、パラリンピックを知り、選手やチームと交流し、体験するという実践が大半であった。「多様性と共生」の視点が矮小化され、パラリンピック競技にのみ焦点が当てられている。③教育の趨勢は、OECD の「2030年に向けた学習枠組み」などに見られるように、能動的な学習者像が示されており、国内的にも主体的対話的で深い学びを推進する段階にある。しかし、検討会議や実践に関わって、新たな教育課題との関わりから検討された痕跡は薄い。

まとめ：インターセクショナルな多様性・共生の視点が不足している。また、オリパラ教育の設計段階から掲げた理念とは乖離し、「東京 2020」のプロパガンダ的意味合いが強まっている状況が確認できる。

.....

<一般発表 2 13:10~13:30>

多様性の視点からみた日本での「身体リテラシー」概念導入の課題

○ 三上 純（大阪大学大学院）

キーワード：身体リテラシー、多様性、体育

目的：日本における「身体リテラシー」導入の課題について、多様性の視点から検討する。本研究では、①日本における「身体リテラシー」導入の状況と ②国外における「身体リテラシー」と多様性に関する議論の検討を通じて、③日本における「身体リテラシー」導入に関する課題の検討を行った。

結果・考察：①日本では日本陸上競技連盟がカナダの LTAD に依拠して、「身体リテラシー」を学齢期に身につけるべき「基本的な運動スキル」として紹介している。「身体リテラシー」を身につ

けることはアスリート育成にとっても生涯スポーツにとっても重要であるため、アスリート育成と学校体育が目標を共有するための概念として主張される(早乙女・CULOS-REED,2018). ②一方海外では「身体リテラシー」は、ハイパフォーマンスを基準としたエリート主義に陥り、「才能のない」者が離脱していくという体育の状況への懸念を背景に、すべての人の身体活動そのものの価値を主張するために発展してきた(Whitehead, 2010). そのため「身体リテラシー」においては、ジェンダー、性的指向、エスニシティ、文化や宗教などを理由に参加が制限されることが課題として認識される(Vickerman and DePauw, 2010). また、「身体リテラシー」は「旅」という比喻で表され、各ライフステージに応じた身体活動の重要性を主張する概念でもある(Taplin, 2019). ③日本ではそもそもの提唱者である Whitehead らの議論ではなく、カナダの LTAD やアメリカの Aspen Institute による発達段階的な「身体リテラシー」だけが、エリート主義的な体育が人々の多様性を無視しているとの問題意識を欠落させて紹介されている。また、それが専ら学齢期に身につけるべき能力とされることで、競技スポーツに価値を置く学校体育のあり方が強化されるという弊害も予想される。日本の学校体育の実態を批判的に捉えつつ、その目標に則した「身体リテラシー」の議論が必要になるだろう。

.....

<一般発表 3 13:30~13:50>

女性アスリートのジレンマと「二重のジェンダー構造」の関係性を問う

○ 申 恩真 (北星学園大学)

キーワード：女性アスリート、ジレンマ、「二重のジェンダー構造」、「ジェンダー規範の葛藤型」

【研究の背景と目的】

本研究の目的は、「女らしさ」が強調される競技の女性アスリートより、「男らしさ」が強調される競技の女性アスリートの方が、様々な矛盾や葛藤を抱える可能性が高い点を提示することである。これに迫るために、本研究では「二重のジェンダー構造」という概念を設定し、女性アスリートの中でも女子サッカー選手の事例を取り上げる。この構造を設定することで、同じ女性アスリートであっても、競技種目によってジレンマ場面が異なっている点が示唆されると考えられる。それゆえ、本研究では、最初の試みとして女子サッカー選手の事例を分析し、彼女らの葛藤局面のリアリティを描くことにした。

【調査概要】

2015 年 5 月から 2016 年 7 月、日本女子サッカーリーグの加盟チームに所属している女子サッカー選手 17 名にインタビュー調査を実施した。本研究では、そのうち 3 名の事例を取り上げて考察を行う。

表 1 対象者プロフィール

	所属先	属性	年代 (調査当時)
W さん	K チーム	アマチュア選手	20 代
S さん	K チーム	アマチュア選手	20 代
恵さん	P チーム	アマチュア選手	20 代

【考察】

結果としては、「男らしさ」が強調される競技に参加した女性アスリート、つまり本研究でいう「ジェンダー規範の葛藤型」にカテゴリーされる女子サッカー選手や女子野球選手、女子ラグビー選手などは、競技生活において他のタイプの女性アスリートより、多くのジレンマを抱える懸念がある点が見られた。この結果から、「二重のジェンダー構造」は、女性アスリートの日常生活における様々な矛盾や葛藤、格差を論じる上で有効な概念として用いられる可能性が示唆できたと思われる。

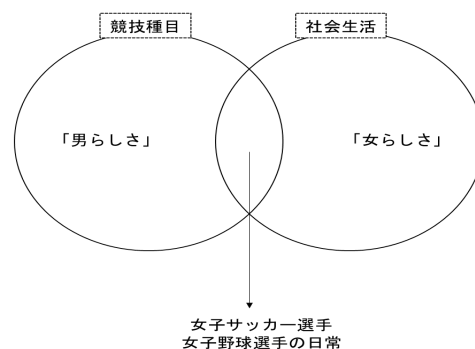


図1 「二重のジェンダー構造」
タイプ③「ジェンダー規範の葛藤」

<一般発表 4 13:50~14:10>

トランス・アスリートの受容に関する研究

○ 松下千雅子 (名古屋大学)

キーワード：トランスジェンダー、トランス、アスレティック・アイデンティティ、公正世界信念
トランス・アスリートの競技スポーツへの参加は、これまで幾度となく議論を引き起こしてきた。高レベルのテストステロンが身体的な利点を生み出すと考えられていることから、競技の公平性を理由に、多くのトランス女性が、公式戦の女性部門から排除されてきた。米国では、1976年にはトランス女性テニス選手レネ・リチャーズが全米オープンから排除され、2003年には、別のトランス女性が女子全国アイスホッケートーナメントへの出場を禁止された。トランス女性と比較して、トランス男性が競技上の利点を持っていると見なされることは少ない。しかしトランス男性もやはり性別二元制のスポーツ環境において排除と疎外を経験している。たとえば、トランス男性のマック・ベグズは出生証明書の性別が女性であったため、テキサス州の高校レスリング・トーナメントで男性部門への出場が許可されなかった。日本国内において、このような具体的な事例は現時点でさほど多く報告されてはいないものの、今後、トランス・アスリートのスポーツ参加は増加すると思われる。その時に備え、競技の公平性を担保しつつ、彼らを支援し受容するための素地を整えるために、本研究では、スポーツ大会におけるトランス・アスリートの受容に影響を与える要因を検討した。中部圏の大学の体育会に所属する大学生から収集した定量データについて、線形混合効果回帰モデルを使用して、トランス・アスリートの受容を従属変数とし、トランス・アスリートが置かれた状況と調査回答者の心理的構成要素の影響を独立変数として分析を行った。トランス・アスリートが置かれた状況に対する理解を深め、彼らを排除し疎外する要因を探ることにより、本研究がトランス・アスリート支援を促進するのに役立つことを期待する。

<ワークショップ A 14:25~15:25>

テーマ：

「コロナ禍における体育・スポーツに関連する話題」

コロナ感染拡大がスポーツに及ぼす（であろう）影響について、「人々のスポーツ実施」と「スポーツ界への経済的な影響」という視点からデータに基づいて話題を提供する。さらには参加者のコロナ禍における生活の中で見聞きした経験なども含めて意見交換し、起こりうる問題点を共有しつつ今後の社会やスポーツに関する研究視点を広げる。

話題提供①

「コロナ禍における運動・スポーツ実施状況—ジェンダー差は生じているのか？」

○ 大勝志津穂（愛知東邦大学）

2020年4月7日に埼玉県、千葉県、東京都、神奈川県、大阪府、兵庫県、福岡県の7都府県に、4月16日には全都道府県に緊急事態宣言が発令され、人々の生活は大きく制限されることとなった。この緊急事態宣言は5月25日に解除宣言がなされたが、緊急事態宣言前の状況に戻ることはなく、「新しい生活様式」と呼ばれる生活スタイルが推奨されるようになった。

このような状況の中で、笹川スポーツ財団は2020年6月に「新型コロナウイルスによる運動・スポーツへの影響に関する全国調査」を実施した。この全国調査の結果は既に、笹川スポーツ財団のHPに掲載されているが、本ワークショップではその生データを用い、ジェンダーの視点から新たに運動・スポーツ実施状況を分析した結果を報告する。分析の結果、男女差が生じている背景にはジェンダーによる影響が存在するのか、しないのか、参加者の皆さんと情報共有しながら意見交換を実施できればと考えている。

話題提供②

コロナ感染拡大の経済への影響はスポーツやジェンダーに如何に波及するのか？

○ 高峰 修（明治大学）

コロナ感染拡大が社会や経済に及ぼす影響は極めて大きいであろうことに異論はないと思われるが、その大きさがどれくらいになるかは未だ見通せない。しかし日本における競技スポーツが企業との関わりを抜きにしては成り立たないことを考えると、諸企業の業績悪化はスポーツ界をも直撃するだろう。東京2020後には各種のスポンサー契約が見直され、さらには政府のスポーツ関連予算も縮小される見通しである。そうした中で諸企業からの金銭的支援の規模が縮小されれば、メジャースポーツに比べてマイナースポーツ、男性に比べて女性、健常者に比べて障がい者のスポーツにとって、その影響は甚大になることが予測される。本ワークショップではこうした問題意識に基づき、スポーツ統括団体の組織運営に関する報告書や各種経済統計を概観する。そしてコロナ感染拡大によるスポーツ界への影響について主に経済面から検討し、意見交換のきっかけとしたい。

<ワークショップ B 15:35~16:35>

テーマ：

「2020 横浜スポーツ学術会議における『スポーツとジェンダー』にかかわるシンポジウム報告」

「横浜スポーツ学術会議」（2020 年 9 月開催）のシンポジウムとして報告された次の 2 題の内容を再度ご報告いただき、意見交換を行う。

話題提供①

「スポーツにおける性別二元制と高アンドロゲン症規定」

○ 井谷聡子（関西大学）

2019 年スポーツ仲裁裁判所は、World Athletics（旧 IAAF）の高アンドロゲン症規定を「差別」と認定しながらも、男女別で競技を行う上で必要な措置として認める判決を下した。現行の規定は、かつての性別確認検査から性別詐称を防ぐというロジック自体は変えたものの、女子選手の出場資格を特定の生物学的特徴で規定する差別的制度であるという点において変化はない。しかし、近年のデュティ・チャンド選手やキャスター・セメンヤ選手らによる一連の訴訟の中で、「人権」よりも「競技の公平性」が優先される傾向が明らかになってきた。その一方で、2020 年 6 月に国連人権委員会は、スポーツによる高アンドロゲン症規定を人権侵害として批判し、各国にその規定の運用を禁止するよう呼びかけた。本ワークショップでは、ここ数年目まぐるしい動きを見せているスポーツにおける高アンドロゲン症規定をめぐるスポーツ統括団体、国際人権組織の立場や主張を概観し、この問題をめぐる国際的な議論を整理する。

話題提供②

「性が固定されがちなスポーツにおいて、それを克服してきた選手たち」

○ 宮嶋泰子（スポーツ文化ジャーナリスト、カルティベータ代表）

2020 横浜スポーツ学術会議の一般シンポジウムに提出した「性が固定されがちなスポーツにおいて、それを克服してきた選手たち」というテーマについて話す。日本で独自の発展を遂げた男子新体操について、菅正樹さんは、最近では女子でチャレンジしたいと言ってくる子供たちが増えているという。アフガニスタンで柔道に魅せられたフリバ・ラザイーはアテネ五輪で初めての国内女子代表選手となるが、タリバン政権下で親戚や地域の人々からのひどい仕打ちからカナダに難民として移住。女性はスポーツによって自信をつけることができると唱えて、現在は母国の女子のための人権擁護活動をしている。また、シンクロナイズドスイミング男子の草分け的存在である米国籍ビル・メイは、子どもの頃から自分が楽しんでスポーツをする環境を作ってくれた周囲や、いつかフィギュアスケートのダンスのような男女混合が実現する日までと世界中を回り、その夢を実現させたことを語る。